

遺構は語る懐深し松井田城

〔松井田城攻め進軍ルートと付城〕

山 添 康 夫

松井田城を取り囲むように陣場、陣馬と称する小字が字限図では五ヶ所程存在する。

武田信玄による上州侵略、天正十八年の豊臣秀吉による小田原征伐軍の将兵の布陣が字名に表象されたものであろう。

ところで、細野二区の西雨請地内と六区の日蔭山地区の二ヶ所に大将陣と称する地名が存在することは余り知られていない。

豊臣秀吉は天正十八年三月十六日付けで、前田利家を北陸道の大将に任じている。

そして、この二ヶ所は天正十八年の松井田城攻めの主力軍の移動にも関連するものと考えられることから、進軍ルート上の輪郭を掴むべく令和元年六月十二日に石井俊介氏と探査を行った。

範囲は五料の御所平から高墓を経由し細野二区に至る

林道 高墓・道添線と野ヶ久保・高墓線が交差するあたりを起点として、松井田城に至るまでの間のルート等を推定するものである。

西雨請地内の大将陣は、起点から反対方向の碓氷峠方面に上らなければならないこと、地図による現地確定が出来ていないこと等を勘案し、次の機会に探査を行うことにした。

探査区間の内、前述の交差点から途中のモトクロスコース場までの間は、地図上では道路の形跡は全く見出すことはできなかった。

更に、この区間は、松井田城攻めの最短コースであるとともに、松井田地区の山中では類を見ないほどの等高線の緩さを併せ持つことから、進軍ルートとして征伐軍に選択されたことは容易に想像できた。

願わくは、これらを裏付ける何らかの遺構の発見に淡い希望を抱いた。

私たちは林道野ヶ久保・高墓線を下らずに、交差付近の雑木林から山に入った。幾分下がり勾配の起伏の続く山中は、折れた枝や落ち葉に覆われていたが、何か古の道を踏み分けているような感じがした。

辿った道もやがて林道に合流し、百メートル進むと再

び山中へ入る道が目に入った。しかし、入口付近に伐採した太い枝を積み上げるなどして、山に入れないように遮ってあった。

侵入拒否の意図が解らぬまま、私達は脇の土手を這い上り、かすかな道の形跡を辿った。ここからの道は若干の高低はあるものの、真つ直ぐに杉林の中を貫いているようであった。歩いていて何かフカフカと足の裏が心地よい。

木立と杉林の台地は広く長い。起伏も余り感じないことが、地図上で緩い等高線として現れていたのである。はつきりとした道の形跡は無いが、何故か真つ直ぐに前進できる。江戸時代、坂本宿の定助郷として土塩、新井、高梨子、国衝、上増田、下増田、小日向、上後閑が定められた。各地から坂本宿への出役は、このルートを経由したことも考えられることから、往來の名残りを感ぜさせるものがあるのかもしれない。

碓氷峠を下った城攻めの各種足軽(弓、鉄砲、槍)隊、騎馬武者隊、小荷駄隊等にとって、見通しが良く高低差のない直線路は進軍に最適であったと思われる。

更に、この台地は数万人の兵士の野営も可能とする懐の深さを併せ持っている。

今では、人が訪れることも無く忘れ去られたこの台地は、間違ひなく松井田城攻めの軍事道路としての役割を果たしていたと考えられる。

交差起点から約六百メートルで森を抜けた。

ここからは、軽四輪車なら何とか通れる草茫々の道路が現れた。右側には桑畑や耕作放棄地がみられるようになり、ほぼ左前方に東京電力の白石高压送電塔が聳え、近くにひっそりとしたモトクロスコースが見えた。

コースを過ぎ、碎石が敷かれた下り坂を七百メートル進んだあたりで、丁字路にぶつかると、左折をすると三室の乾窓寺方面に至る。

丁字路の約百メートル手前付近の右側の地形に注目したところ、杉林の中に人為的加工を窺わせる郭の断面が見えた。

通りから高さ一メートルぐらいの段丘を登ると、西から東方面に堀切を隔てて小郭が二つ現れた。

やや大きな堀切を経て、更に東に進むと東向きに下がり勾配ではあるが、かなり広い規模の平地が現れた。

西側には強固な土塁も築かれており、ここが名実ともに主郭と考えられる。

主郭に寄り添うように下段に二本のはつきりした帯曲

輪が見られ、いずれも小道に接続している。

主郭の縁を南方面に移動すると三本目の帯曲輪の一部が杉の枝越しに現れた。

三本目は道路側では樹木の茂みの中に隠れ確認できなかったものと思われる。

主郭部から南側を覗くと、南に延びる険しい尾根が一本続いている。直下には東京電力の西城高圧送電塔の赤い頂上部だけが顔を出していることから、位置的にも標高は高いと思われる。

この郭から碓氷峠方面を振り返れば、なだらかに上り勾配の杉林が続くばかりであり、その先の状況は全く見通すことができない。

南側は尾根を含め峻険な谷、断崖になっていることから、敵の侵入は考えにくい。どう見てもこの郭(城)の顔は東を向いている。

郭(城)に沿うような小道を松井田城方面に少し下ると、左側には目もくらむような谷が隣接し、そこには、崩壊を防ぐ格子状のコンクリートの土木処理が施されていた。

右側からも深い谷が迫り、あたかも天空の馬の背道の様相を示している。

松井田城を本城とし、ここを征伐軍に対する防衛拠点の出城だとするとどうだろうか。主郭部は斜面上の郭の下部に存在することから、碓氷峠側からの圧倒的な敵軍により、東側から南側にかけての谷底に突き落とされてしまう危険性がある。

更に、敵軍の進行状況も見通せないこと等を勘案すると、抵抗拠点として考えるのには、甚だ不合理と言わざるを得ない。

そこで、頭を切り替え、征伐軍の拠点としての位置づけを検討したらどうであろうか。

資料としては、天正十八年四月七日付けの豊臣秀吉から鍋島加賀守宛の豊臣秀吉朱印状(鍋島文書)の存在を考慮に入れる必要がある。

この中では、豊臣秀吉が松井田城攻めに付城を築くよう真田昌幸、上杉景勝、前田利家に命じた旨が記されている。

付城は敵戦力が強かったり、敵の城が要害堅固であった場合に築かれたものである。

この郭(城)を付城と考え、松井田城の西に位置することから西城と仮定した場合、西城の海拔は四百七十メートル、松井田城の本丸は四百十六メートルである。

海拔差約五十メートルに対し、その間は中間の山に遮られることなく見通しも良く、距離は九百五十メートルである。

この位置関係は、小田原城攻めの石垣山城（一夜城）を想定させるものがある。松井田城籠城の兵士の戦意欲を失わせる効果は十分あったと思われる。

ちなみに、この郭（城）は字限図では西城に存在するのである。

この仮称西城から松井田城へは、地図上では小道を五百五十メートル下ることになる。そこは、左折をすると新井地区方面、直進すると松井田バイパスに至る分岐点である。

この分岐点が松井田城域の西端である。

このルートは、等高線に逆らうことなく稜線を削り込みながら下っていくのである。現在でも車一台分の道幅である。

戦国時代にも、このルート存在の可能性はあったと思われるが、現在よりも道幅も細く、侵攻軍の大軍の移動には適さないとと思われる。

そうしたことから、別途、新たな進攻ルートの存在を確信し、地元の古老から話を聞くなどしていたが、依然

解明ができないままであった。

そうした中、この探査の前段として、六月一日に行われた松井田城址保存会による終尾根道の草刈り後、石井俊介氏と地元の地理に精通した金井政夫氏と西城下の崖から山に入り、日蔭山の大将陣と推定できる広い舌状の平地を見出した。ここは、十分な水補給が可能な場所でもある。

この陣からは、本丸、二の丸の状況は手に取るように把握できるはずである。

更に、推定地の近くまで延びる軍用道路と思しき遺構も発見することができた。

本件については、今後、更なる探査や検証が必要なことから本稿での詳細は省きたい。

今回の探査を通じて、全ての道は時代の変遷により衰退をするものであるが、その時々々の主要道から細野地区（土塩、新井）へ通じる道は、利便性を求める住民により旺盛に連結されていたことを改めて知った。

（参考文献）

安中市史第四卷

松井田町誌

細野の歴史散歩

